

< 主体的な学びへの転換 >

自分の考えを

自分の言葉で

分かりやすく伝える！！

夢実現！ <小中連携>

授業改革への挑戦

たのしく

ためになり

ためしてみたいくなる

サンタの学習指導実践を通じて！

小中連携 授業改革への挑戦

～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

1 小中連携した授業改革のアイデア ～主体的な学びへの転換

児童生徒の主体的な学びへの転換を図るに、以下の(1)～(5)を、小中学校の教師が授業において共有実践を図る具体的取組事項として提案したい。

(1) 単元や各授業における目標のイメージ化を図り、行動目標を設定する。

＊単元を通してのゴールや授業のゴールを行動目標化して明確にする。

(2) 児童生徒が「自分の考えを、自分の言葉で、分かり易く伝える力」を鍛える。

＊個々の児童生徒が、持っている力を駆使して「自分の考えを伝えようとする力」を育む。

(3) 書いたものを読む発表から、自分の考えを伝える発表への転換を図る。

＊読む発表から、相手意識を持ち資料等を活用して、分かり易く伝える発表への転換を図る。

(4) 自分の考えを相手に分かり易く伝えるためにセルフトーク（個人練習）の時間を設定する。

＊発表前に、発表に使うキーワードや資料を使ったセルフトークの時間を設定する。

(5) 行動目標に対する個々の学習成果を確かめるためにチャレンジタイムの時間を設定する。

＊行動目標に関する問題等に挑戦させることで、自らの学習成果について自己評価させる。

以上の(1)～(5)を、小中学校の教師が、日々の授業で共通実践することにより、児童生徒に基礎的な知識及び技能を習得させ、課題解決に必要な思考力、判断力、表現力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことが可能になる。

2 「楽しく、ためになり、ためしてみたくなる（サンタの）授業」への挑戦

ここでは、児童生徒の主体的な学びへの転換を図るために、小中連携による「楽しく、ためになり、ためしてみたくなる（サンタ）授業」への挑戦について提案する。

小中連携教育活動の一環として、《サンタの学習指導過程》を設定して、共通実践を図りたい。

なお、各学校の学習指導過程は、この《サンタの学習指導過程》に適切に織り込むものとする。

《サンタの学習過程》については、以下に示すとおりである。

《 サンタの学習指導過程 》

《 自分の考えを 自分の言葉で 分かりやすく説明する！ 》

- 1 導入で「本時で何ができるようになればよいか」を明確に伝え、板書する。
- 2 学習活動では、①活動のねらい ②手順 ③留意点をきちんと理解させる。
- 3 発問後、自力解決の場を必ず設定して、自分の考えを自分の言葉でまとめさせる。
- 4 共同解決の場を設け、本時の目標に向かって学び合い高め合う授業を展開する。
- 5 チャレンジタイム等を設定して、本時の目標に対する評価を具体的に実施する。

3 <<サンタの学習指導過程>>授業実践上のポイント

前に設定した基本的な<<サンタの学習指導過程>>を中心に据えて、さらに魅力的で分かり易い授業にするために、次の<<授業実践上のポイント10>>を念頭に置き、日々の授業実践に取り組む。

<<授業実践上のポイント10>>

授業は、教師が「教えたこと」を児童生徒が「学びたい」と思った時、初めて成立する。

- 1 本時の目標：「～ができる。」学習が、具体的に評価できる「行動目標」を設定する。
*「～を考えている。」抽象的な目標ではなく、「～できる。」具体的な行動目標を設定する。
- 2 導入：「日常生活」に関連させ、「何ができるようになればよいか」理解させる。
*学習が「何に役に立つ」か、「何ができるようになればよいか！」をきちんと理解させる。
- 3 学習活動：「活動のねらい・活動の手順・活動上の留意点」を明確に伝える。
*「活動のねらい」「活動の手順」「活動上の留意点」を明確に伝え、スムーズな学習活動へつなぐ。
- 4 思考力・判断力：課題解決に向け、情報を収集・活用し「自分の考え」を持たせる。
*「文字」のみではなく資料から情報を読み取り、内容をイメージ化する練習で思考力を育む。
- 5 表現力：「自分の考え」を「自分の言葉」で、資料やキーワードを使ってまとめる力を育む。
*「どうしたら、自分の考えが分かり易く伝わるか」をしっかりと考え工夫させる。
- 6 セルフトーク：相手意識を持ち、「分かり易く」伝える為の「実践練習」をさせる。
*個々の児童生徒に、資料やキーワードを使い分かり易く発表する「模擬練習」に取り組ませる。
- 7 発表：「キーワードや資料等」を活用して、「相手意識」を持った発表を行わせる。
*プリント等を「読むこと」から、「自分の考えを相手に伝えること」への転換を図る！
- 8 練り上げ：個々の考えを「本時の目標」に向かって、学び合い高め合わせる。
*学習の練り上げが、常に「本時の目標」に向かって行われているか、チェックをする。
- 9 チャレンジタイム：「本時の学習が身に付いたか」練習問題等に楽しく「挑戦」させる。
*ICT等も活用しながら、楽しくチャレンジできるような練習問題を工夫する。
- 10 まとめ：「キーワード」等を活用して、本時の目標に沿った「まとめ」をする。
*児童生徒の発表等も大切にしながら、「キーワード」を使って本時のまとめをする。

評価A：「本時の目標が達成できたかどうか」児童生徒自身に「自己評価」を行わせる。

*児童生徒が本時の目標に対して、自身の到達度が実感できるような評価を実施する。

評価B：教師は、「チャレンジタイム」や「自己評価」を見て「指導に対する評価」を行う。

*教師は、児童生徒の本時の目標に対する到達度を見取りや資料等を活用して客観的に評価する。

真の学習成果とは、授業が終了した時点で、一人一人の児童生徒が「授業の学びについて、自分の言葉でどれだけ説明できるか！」つまり「授業で分かったことは何か、何ができるようになったか！」を自分言葉で誰かに伝えることができることである。

《「サンタの授業」実践上の事前準備チェックリスト》

前述した「サンタの授業」実践に臨む時、事前準備として次の点をチェックしておきたい。

チェック1：授業に「授業に必要な基礎・基本」がどれだけ身に付いているか。

＊「児童生徒の実態チェックと事前の補強」が授業の土台となる。

チェック2：「目標—中心的学習活動—まとめ—評価」に整合性があるか。

＊指導過程におけるこの4点の整合性をチェックし、必要に応じて修正する。

チェック3：「授業における児童生徒の思考の流れ」がスムーズであるか。

＊教える側からではなく、学ぶ側から思考の流れをシュミレーションする。

チェック4：指導過程を頭に入れ、児童生徒を見て授業を展開できるか。

＊事前のリハーサルで学習の流れを掴み、発問・板書計画も確認する。

チェック5：「表情・声の抑揚」、「絵・グラフ等の活用」、「話しの筋道」は考慮されているか。

4 実践的な授業づくりへの挑戦 ～板書型学習指導案の活用～

板書型学習指導案は、そもそも日常授業での活用を想定したものであるが、日常授業の延長として、併せて、研究授業学習構想案における本時の展開部分での活用を図ることも提案する。

以下に、具体的な《研究授業における学習構想案の様式》の概要について提案する。

《研究授業における学習構想案の様式》

(1) 単元構想

単元を通した課題（単元の中心的な学習課題）				
指導計画と評価計画				
	1次	2次	3次	4次
指 計				
評 計				

(2) 単元における系統および児童の実態

単元における系統
児童の実態

(3) 授業実践上のポイント（授業実践上のポイント10の活用：授業の中核となるアイデア）

例 ○自分の考えを自分の言葉で分かり易く表現し、セルフトークに重点を置いた展開を図る。

○文章を読む発表ではなく、「キーワードや資料等」を活用した分かり易い発表を行わせる。

(4) 板書型学習指導案（本時の展開）《日常の授業においてはこの様式を使用する》

本時の目標：

学習活動の流れ			
(1)	(2)	(3)	(4)
学習過程における主な発問			
(1)	(2)	(3)	(4)
板書案			

5 学習定着を図る継続的な学習支援策

児童生徒の学力を定着させるためには、授業改革と同時に、学力定着を図るための学習支援策が必要である。次に、児童生徒の学力定着を図るために小中連携による4つ学習支援策について提案したい。

(1) 児童生徒が学んだことを継続的に挑戦できる場の設定

＊継続的な練習プリント、ドリルパーク（タブレット）、漢字・計算ドリル、学習掲示物など

(2) 児童生徒が学んだことを継続的に自己練習できる場の工夫

＊学習掲示物の工夫、個人用練習プリントの工夫、タブレットを活用した練習の工夫など

(3) 児童生徒の自己練習の成果を見取り・励ます場の設定

＊努力に対する励ましの声掛け、できるようになったことへの称賛、次の目標への指導助言など

(4) 児童生徒の中で、成果を上げた事例や工夫された学習方法の事例等を紹介する場の設定

＊努力の成果が出た事例、自己練習を工夫している事例、上手なタブレット活用事例など

授業後において、以上のような学習支援策に小中連携して取り組むことにより、学習意欲を喚起するとともに、児童生徒の学力定着・向上を図りたい。

6 おわりに

今回の益城町中学校区「学力向上」研究実践が、小中連携教育活動の在り方に新しい展望を開き、今後の小中連携教育活動のさらなる創造に向けた **chance（機会）** として、果敢に **challenge（挑戦）** するヒントになり、小中連携教育活動がさらに **change（進化）** することを心より期待する。